



Vol.46

ゆうことみゆきのふくふくトーク ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

アペフツチカムイ(火の神)



新年、明けましておめでとうござ
います。

アイヌ民族博物館の仕事始めは「アシリ
パノミ(新年の祈り)」から始まります。一年
を無事に過ごすことができたことに感謝を
し、これからの新しい年が、良い年となるよ
うにと願う祈り。博物館の職員皆が参加し
おこないます。
祈りは、火の神への祈りから始まります。
火の神は、人間の国が創造されたときに二番
初めに国土の守護として、カントモシリ(天
上の神の国)から降りられた神で、常に神々
と人間との間に立ち、仲介者として人間の
言葉を神々へ伝えてくれる神とされている
の。最初に火の神に祈り、それからそれぞれ

の役割をもつ神々に祈り、最後にもう一
度、火の神へねざらいと、感謝の祈りをお
こなうの。

新しく家を建てる際、最初に招き入れら
れるのが火の神さま。火の神は、囲炉裏の中
央の灰の下にコンカニチセ(黄金の家)を建
てて住み、火や煙は火の神が与えてくれる
ものと考えられているの。灯りをともし、暖
かさを与え、煮炊きをするにも欠かすこと
のできない火の神は私たちの身近にいてい
つも見守ってくれる大切な神さま。

アペフツチカムイ(火の神)、イレスカムイ
(育ての神)、カムイカツケマツ(神の淑女)と
さまざまな名前と呼ばれる火の神。優子さ
ん、カムイユカラ(神謡)のサケへ(折り返し
の詞)「アペメルコヤンコヤンマツ、ウナメルコヤ
ンコヤンマツ」も火の神の呼び名だといわれて
いるよね？



「アペメル：マツ」は「火の
輝きがそれに向かって上が
っていく女」、「ウナメル：マツ」は
「灰の輝きがそれに向かって上がっ
ていく女」という意味。これ全体で、
火の神の本名と言われます。だか
ら、このカムイユカラは、サケへを聞
いただけで火の女神のお話だとわか
るの。さてそのあらすじは――

私はいつものように刺繍をしていた。ところが
夫が家を出たつきり帰ってこない。占ったところ、
水の女神と懇(ねんごろ)になつていのがわかっ
た。私は身支度をして出かけ、水の女神との巫術
競べに勝利した。彼女が詫言したので私は許してあ
げ、家に帰った。翌日、夫も帰ってきて私に謝った
ので、再び仲良く暮らした。

なんだかとても人間臭いでしょ。火の女
神は普通、フツチ(日高地方ではフチ)つまり
「おばあさん」と考えられているんだけど、こ
の女神は夫を取り戻すために相手の家に乗
り込んだよね。しかも巫術、つまり霊力バ
トルで勝っちゃうんだからパワー全開。それ
に火の女神は六枚の小袖を重ね着して帯を
締め、その上に六枚の小袖を羽織ってヒラヒ
ラさせてるらしいの。案外、妖艶系熟女？



でもね、札幌大学ウレシバクラブのマス
コットキャラ「うれしば
あ」も火の女神なだけ
ど、とってもカワイイお
ばあさんなの。それを
見た知り合いの女性が
「ばあさんのマスコット
なんて見たことない。嬉
しいねえ」って。やっぱり
火の神さまは、皆に親
しまれ尊敬されるおば
あさんがぴったり！

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。